

○大室 弘美¹, 中嶋 弥生¹, 齋藤 充生², 湯田 康勝¹

¹武蔵野大薬, ²帝京平成大薬

漢方製剤は体質・症状にあわせて適切に使用しなければ、目的とする効果が得られない上に、副作用発現の可能性もある。また、他薬剤との相互作用等の可能性もある。しかし、一般用漢方処方製剤（OTC漢方薬）は薬剤師等による積極的な情報提供は不要とされている第二类医薬品であり、添付文書は需要者が自ら判断できるよう作成されてはいるが情報は不足している。本研究では、OTC漢方薬の適正使用に資することを目的として、まず、豪州のセルフトーカー（ST、OTC適正使用のための需要者向けセルフチェック資材）等を参考に、日本版ST（jST）及び薬剤師向けの資材（IP）を作成した。

需要の多い5カテゴリー（風邪、咳・のど、尿の悩み、婦人の悩み、肩こり・関節痛・神経痛）の16処方を対象とし、jSTには当該製品の添付文書の記載内容等から「服用できない場合」と「薬剤師等に相談が必要な場合」等を平易な言葉で記載し、IPには「薬剤師等に相談すること」等の安全性に関する事項、並びに需要者の体質・症状に合わせて適切な漢方製剤を選択するための情報を記載した。また、用語等に関する一般人及び現場薬剤師の意見をそれぞれjST及びIPに反映させた。今後、実際に現場で使用し需要者及び薬剤師等の意見を収集し、改善点及び適正使用への寄与度等を調査する予定である。

以上のような資材は、国民の医薬品及びその使用に関する知識を深め、また、薬剤師の正確かつ適切な情報提供に寄与することを通じ、OTC漢方薬の適正使用に資すると考える。